

復興応援プロジェクト「元気のできるマガジンを作ろう」

－被災地・被災者とつながるマガジンづくりで自分の思いを表現する子どもを育てる一試み－

仙台市立吉成小学校 教頭 加藤 富久子

yosinari@sendai-c.ed.jp

キーワード：総合的な学習の時間、復興活動、ICT機器、協同学習、情報の共有、つながる

1. はじめに

平成26年、宮城県震災復興計画における「再生期」元年を迎えた。宮城県・仙台市の将来の発展に向けて、社会全体で被災者の方々の生活再建を願い、全力で取り組んでいる日々である。本校は仙台市西部の高台に位置し震災の被害が小さく、児童は「被災」という言葉を聞いてもなかなかイメージできずにいる。「復興活動」も、表面的な活動に終始するのではないかと懸念し、本校独自の「復興応援プロジェクト」を立ち上げた。第6学年の総合的な学習の時間に、震災復興に関する活動を実践するとともに仮設住宅で暮らす人々とも交流し、たくましく生きる力を身に付けることを目指す。本稿では平成24年度の取組について紹介する。

2. 実践の目的

復興を支援する外部機関や団体と協同し、児童が被災者の立場になって考え、できることを実践することで、復興への思いと社会参画への意識を高める。また、体験活動で得られた情報を学習に生かすために、必要な情報を主体的に収集し、正しく判断し、相手の状況や気持ちを踏まえて、適切に発信する能力を育てる。

3. 実践の概要

3.1 単元の目標

- (1) 震災復興の現場を訪問し、見たり感じたりした内容をもとに、自分たちができることを考えようとする。
- (2) テーマに基づき取材活動を行い、自分の思いや考えを表現しようとする。
- (3) 復興応援雑誌「元気のできるマガジン」を作る。

3.2 実践の特徴

ゴールはマガジンの完成である。主としてマガジンのレイアウト考案時、記事の編集時、プレゼンテーション実践に「ICT機器を活用した。全児童が操作を得意とするわけではないが、様々な過程で役割分担し、機器活用が効果的であることを理解できるようにした。

- (1) 被災現場訪問で得られた情報を、ICT機器を活用して発表し、児童全員で課題を共有して学習を進めた。
- (2) 復興に携わる多くの方々と協同して話し合い、探究的な活動を繰り返しながら課題解決を図った。
- (3) 仙台市教育委員会が推進する自分づくり教育で育成を目指す能力や態度を育成することができた。

3.3 ICT機器活用について

(1) iPadは、数人で1台が使用できる環境にあり、グループ学習に最適であった。グループ内で相談し合い、その場ですぐにパネル操作しながら作成・修正することができる。また、体験活動で撮影した写真を並べ替えてプレゼンテーションを行うことで、1つのグループの体験を全員で共有することができた。さらに、カメラ機能を活用して動画を撮影し、仮設住宅で暮らす方々へビデオレターを贈った。

(2) マガジン制作時にはSkyMenuを活用し、教師機から作成中のマガジン原稿やレイアウトを映し出し、意見交換しながらより良いページ作りに役立てた。

4. 実践の内容

4.1 被災の状況を知る

児童に、被災程度や、復旧の進捗状況をきちんと把握させたいと考え、震災後のまちの様子、復興状況について調べることを夏休みの課題にした。一人一人が新聞スクラップを行い、分かったことや感想などをまとめてきた。震災から1年5か月過ぎても災害公営住宅の整備がや生活環境の改善が十分ではなく、まだまだ様々な問題があることに気付くことができた。

4.2 課題は「元気ができる」マガジンを作ること

(1) 自分で被災の状況を調べたが、さらに、仙台市復興事業局の方を招き、児童の調査だけでは分からない復興の現状について話をうかがった。少しずつ仮設住宅の生活は安定してきているものの、知り合いが少ないことや孤立傾向、コミュニティ喪失の危機が問題になっていることを聞き、「つながり」や「元気」をテーマにした※マガジンを作ることに決めた。同時に、被災現場や仮設住宅を見学する計画も立てた。

※マガジン（地域情報紙：子どもの目で被災地を見て、被災者に会って、子どもの思考で復興を応援する雑誌）

(2) 被災地等を見学、取材したことを盛り込んでマガジンを作るが、児童に、マガジンのイメージを持たせたいと考え、雑誌制作会社の方を招き、編集の仕方やページレイアウトについて学んだ。より良い内容、レイアウトになるよう話し合い、仮のレイアウト案を作成、実際の取材活動をイメージしながら準備を進めた。

4. 3 被災現場見学と取材活動

9月に、2か所の仮設住宅と被災した堤町佐大窯半壊現場、メディアテーク「3月11にちをわすれないためにセンター」を訪問した。デジカメやビデオで写真や動画を撮影し、まとめの活動に生かした。



写真1 仮設住宅で取材活動

4. 4 情報の共有とマガジン内容の再吟味

取材で分かったことをPC-Wordで編集してマガジンの初稿を作成する。SkyMenuで共有し、それぞれのグループの内容について話し合ったところ、取材の事実を文章にしているだけで、人の心を打つ内容にはなっていないことに気付いた。被災者を励ますマガジンづくりに必要なものを探るために再度被災現場を訪問することにした。

4. 5 取材再び・・・再生を目指す地域と復興を願い頑張る人たちと応援する児童のつながり

仮設住宅で暮らす人は、沿岸部で被災し農業を営んでいた方が多い。津波を被った農地を再生させ農業復活を目指し励んでいる方に会い、その思いや願いを取材した。メモや写真などを繰り返し見て話し合うことで相手の心に寄り添うことができるようになってきた。被災現場の地を踏み風景を眺め、色や空気の臭いを感じ取り、土に触れたことが児童の心を強く動かした。「元気を届けたい。」児童は初めて「復興を応援する」意味を捉えたように感じた。

4. 6 マガジンに野菜の断面図

被災した方々を励ますのは自分たちであり、農業復活に懸ける強い思いに寄り添うためには、大事なもの・ことを共有してつながることの必要性に気付く。それは、野菜を慈しむ思い・願いと今後の生活への期待である。再生させた農地で収穫した野菜を縦に切り、断面図をモチーフにした絵を描き、被災者を元気づけるメッセージを添えた。



写真2 野菜の断面図

4. 7 マガジン作り最終段階

レイアウト確定後、PC-Wordで文章を作成した。SkyMenuで作成中のシートを共有しながら、読み手の笑顔と気持ちを想起し、皆が元気になるマガジンになるように工夫を重ねた。



写真3 記事の編集作業

4. 8 マガジン完成報告会

仮設住宅で暮らす人たち、お世話になった方々を招き、マガジン完成を報告する会を行った。PCやiPadで作成したプレゼンテーションも行い、これまでの活動を一緒に振り返った。仮設住宅に配布する際には、参加できない児童の思いをiPadのビデオレターで伝えた。



写真4 iPadでプレゼンの練習

5. 実践後の考察

iPad、PCの操作活動では、レイアウト、文章、写真、イラストなどの様々な場面で、児童一人一人の特性を生かした活動が展開される。機器操作が不慣れな児童も積極的に取り組み力を発揮した。また、ICT機器を使用して目的に適う映像を児童に見せると、問題が可視化されるので児童の言語活動が豊かになり、教師の期待以上の効果を得ることができた。



図1 完成したマガジン